

第 16 回 横浜市交通政策推進協議会 会議要旨	
日 時	平成 29 年 3 月 30 日 (木) 13:00~15:00
開催場所	崎陽軒本店 6 階 1 号会議室
出席者	中村委員、渡邊委員、鏑木委員、荻島委員、永井委員、張委員代理 柳澤氏、八郷委員、金子委員、太田委員代理 大野氏、駒田委員、牧田委員、本村委員、宮島委員代理 福山氏、佐藤委員、松尾委員、小田部委員、清水委員、千葉委員、松井委員
欠席者	なし
開催形態	公開 (傍聴者 3 名)
議 題	1. 横浜市から情報提供 2. 各者からの情報共有 3. その他
議 事	<p>1. <u>横浜市から情報提供</u> 事務局から説明後、次のとおり質疑があった。</p> <p>(鏑木委員) 都市交通計画の改定については、各部会での議論内容について、全体共有が必要。</p> <p>(事務局) 承知した。</p> <p>(小田部委員) シンポジウムの参加者の多くは、元々移動に関心がある人だった。今後は、これまで交通に関心がなかった人の参加も増やしたい。</p> <p>(中村委員) その通りだが難しいこと。興味を持ってもらい、それを参加に繋げるため、協議会や部会で知恵を出し合うなどして、今後も考えていってほしいと思う。地域の方々に、より関心を持ってもらう裾野の広がり方が大事である。</p> <p>(荻島委員) 高齢者バスモデル事業に関して、オペレーション (運転手など) への応募状況等は。</p> <p>(横浜市道路局) 10 人程度とタイトな状況で実施している。利用者数については、地域に周知が行き届いていないことなどもあり、1 日で 5, 6 人程度のときもあれば 0 人のときもある。そのような中で、地域の方々とも話し合いながら進めている。</p> <p>(中村委員) 市の交通政策において、地域サポート事業が持つ役割を補完する形で「高齢者の移動支援」がある。今回の場合はたまたま車両が入手できたという特殊な条件下ではあったが、このやり方はきちんとモニタリングすること</p>

で意味があると思う。どういう風に根付いたか、どんな課題があったか等について、今後もこの場あるいは部会で情報共有してほしい。また、将来的なあり方、方向性についても考えてほしい。

(荻島委員)

都市交通計画改定案の政策目標6「来街者が楽しく快適に回遊できる多様な交通手段の提供」は、インバウンドを含め、これから横浜の経済活性化に重要だと考える。団体バスの乗り降り、さばきについては、スペース上の課題もあるだろうが、大型クルーズ船の寄港なども踏まえ、是非考えてほしい。

(佐藤委員)

団体バスについては、インバウンドに限った話ではないが、以前に中華街周りで路上でのバスの乗り降りに課題があり、事業者への周知により改善された。団体バス対応や駐車場について、引き続き検討したい。

横浜駅では、YCATの協力のほか、東口に乗降場を設けるなど、色々な対策を取っていきたいと思っている。

大さん橋では、交差点の信号現示を改善して混雑が緩和したようだが、引き続き取り組んでいきたい。

(中村委員)

インバウンド＝必ずしも団体バスしか選択肢がないわけではないと思う。そのうち市内の鉄道やバスなどの公共交通を使う団体も出てくるのではと思う。なので、既存の公共交通の資源を使うことについて、もう少し前に出すべき。例えば、大さん橋から日本大通り駅まではさほど遠くないが、初心者には分かりにくいかもしれない。そこで導線を上手くデザインすると、大さん橋から快適な道のりで電車まで行けるようになる。ただ一方で、事情で団体バスを使わなくてはいけないケースもあると思うので、貸切バス事業者とも調整し、その仕分けを考えてほしい。ただ、個人的には、交通政策としては、なるべく歩くことが理想だと思う。団体バスの「乗車」、「降車」、「待機」の場所は厳密に分け、「時間」についてもしっかりと定められた方が良さだろう。交通管理者と調整の上、きめ細かい指導が必要となる。

(渡邊委員)

コミュニティサイクル事業について、決済手段がクレジットカードだと学生には敷居が高いのでは。今後IC化など多様化できないのか。

(佐藤委員)

交通系ICカードの利用は課題の1つである。学生に対しては、駅にポスターを貼るなどしてPRを行っているが、利用率はまだ低い。ほかにも、コンビニと連携し、小規模ポートを設置できないか等を考えている。

(中村委員)

コミュニティサイクルは東京5区でも同様の技術で行われているが、他事

例（海外含め）の進み具合にも注目した方がいい。特に北京と上海は近年勢いがあるので、お金の決済の仕方や、利用者プロモーションの仕方を勉強してほしい。なお、最近はクレジットカードを持っている学生も増えているので、学生の利用率が低いのは、クレジットカードとは別の要因かもしれない。（既に自転車を所有している場合もある。）

（清水委員）

地域交通を考えるには、バス交通施策の予算が少ないように感じる。地域交通サポート事業では、市は本格運行には補助を出さない方針ということは知っているが、支援のあり方については十分なのかと感じる。採算性に関しても、市としてもっと支援すべきでは。

（横浜市道路局）

厳しい財政状況の中、どこまでできるかというところはあるが、地域交通サポート事業を活用し、いかに利用しやすくできるかを考えることで、採算性の向上にもつながると思う。地域の方々への「乗ろう」という意識づけや啓発活動など、引き続きよい形を目指して取り組んでいきたい。

（鏑木委員）

地域交通サポート事業を10年以上やってきた中で、ここをもう一工夫すれば良い、などの分析はあるか。

（横浜市道路局）

住民に乗ってもらうために、例えば実証運行期間を1年間に延長したり、取組前に体験乗車を行ったりして、地域の人に地域の交通のあり方を自ら考えてもらうことに取り組んでおり、引き続きやっていきたいと思う。

（中村委員）

そのような方向で実施するのに、この予算で足りるのかという印象がある。一方、生活交通バス路線の維持路線で乗客を増やし、少しでも補助を減らすための活動は、誰が担うのだろうかと思う。我々としては交通政策全体で考える中で今回はたまたまバスだが、それぞれに乗って使ってもらおう大枠の中で、ぱっと見たとき、それがなかなか伝わりにくいところもある。いずれにせよ、今後どうあるべきかをどこかで議論してほしい。

2. 各者からの情報共有

続いて、2. 各者からの情報共有について、「(1) 福祉と交通の連携について」を地域交通部会長の清水委員から説明後、次のとおり質疑応答があった。

（渡邊委員）

自分のように働いていても、ボランティアには参加できる。ボランティアの敷居の高さを低くし、少しでも支える側の市民を増やせられればと思う。

(小田部委員)

福祉交通を利用せざるを得ない人の予備軍も多いと思う。その人たちに、まちに出歩いてもらう必要がある。そのためには、まちの中に魅力ある場所、出かけたいたいと思える場所があることが大事。都心部に限らず、地域交通と都市計画との連携が求められる。

(中村委員)

住民が地域での支えあいを行うときに下支えとなる仕組みに関して、交通計画における枠を確認しながら、必要に応じて直すのは大事。また、実際にボランティアなどで手伝いたくてもどうすればいいか分からない人をつなぐ仕掛けを含められれば、次につながる。小田部委員のご意見は、予防医学の視点であるが、あらかじめそのような対策を行うことで、全体のニーズ量も変わってくると思う。

「(2) タクシーが気軽に使え、外出機会を創る為にできること」を神奈川県タクシー協会の大野代理委員から説明後があった。

(清水委員)

タクシーと福祉運送の外出支援は目指すところが重なる部分も多いので、連携できないかと思う。利用者にとっては、「移動手段」でなく「移動すること」が目的だと思うので、それを踏まえた配車システムを考えられたらと思う。

(大野代理委員)

ナビタイムのような交通モード横断型で考えられたアプリは使いやすい。配車システムの開発も、タクシーに限らず、例えば個別輸送として考えられれば良いかもしれない。

(中村委員)

フィンランドのMaaS (Mobility as a Service) は、タクシーも福祉輸送も1つのアプリ上で配車できる優れたもの。これから新しい形が見えてくると思うが、ぜひ先手を取ってほしい。

「(3) 関東運輸局の取組について」を関東運輸局の牧田委員から説明後、次のとおり質疑があった。

(渡邊委員)

以前、国土交通省が取り組んでいた市民による交通サポーター制度では、栃木県内のとあるバス停において、異なるバス事業者の時刻表の統一化を行った。このような取組を横浜市内にも広めてほしい。

(牧田委員)

「関東交通観光戦略 2016」の「2017年度行動計画」の中で、観光に絡め、

「一元化した経路情報の提供」を掲げている。今後広げていければと思う。
(中村委員)

時刻表の統一は、デジタル化の進展により、あるとき突然進むと思っている。そのときは、運輸局からの一言があるとなお良いだろう。

「がんばる地域応援プロジェクト 2017」について、実態としては「出かけたけど出かけられない」という潜在需要があると思う。特に高齢者や福祉の話の場合、結果的に移動を我慢していることがある。もし、一生懸命に外出を促し、それが健康の維持につながるなら、とても意味のあること。資料にもあるように、潜在需要を把握することは重要。だが、アンケート調査では見えてこないのが把握することは難しい。

全体をとおして、本協議会のように議論できる機会があることが大事。

(事務局)

次回の協議会の日程については、各部会の活動状況を踏まえた上で別途連絡する。

以上